

困難の連続の中にも キラリと光る幸せがある



安藤和津
「エッセイスト・コメンテーター」

vol.
10

毎号、著名人に看護や医療、看護師とのかかわりについてエッセイを
ご執筆いただきます。
*姉妹誌「看護」（日本看護協会機関誌）にも同時掲載

まさに光陰矢の如しである。今年の春、私は75歳を迎え「後期高齢者」となった。人生あとどれだけ残りがあるのかは、神のみぞ知るところだが、われながらよくぞ生き延びてきたものだ感慨深い。

幼稚園の年中だった5歳のとき、自宅の門の前庭で遊んでいたら、運転を誤ったオート三輪が門を突き破って飛び込んできて、私は下敷きになった。今でも忘れられないのが、口を真一文字に食いしばり、私を抱き抱えて病院にひた走る母の表情だ。この事故で生命を取り留めたのは奇跡だったらしい。たまたまタイヤがおなかの上でバウンドしたおかげで内臓破裂は免れ、大腿骨複雑骨折、左肩複雑骨折で済んだのだが、8時間近くの大手術を経て半年間の入院生活となった。今でも不思議なのは、1人ぼっちの夜をわずか5歳の私はどうやって過ごしたのだろう。寂しさや

心細さはギュッと心のどこかに閉じ込めてしまったのかもしれない。

小学校に入学すると、ずっしりと重いランドセルと電車通学のストレスからか、しょっちゅう熱を出した。わが家には、重度のリウマチで寝たきりの祖母と脊椎カリエスで6歳児ほどの背丈しかない叔母が同居していて、週2回ほどガッシリした体躯の女医さんが往診に来てくれていた。「バクダン」と呼んでいたぶっつい注射を肩だの背中だのに打つのだが、外出がままならない祖母も叔母も女医さんを心待ちにしていた。いつも代わる代わる、不調を訴えたり、他愛のない世間話をした後、奇跡のバクダンを打つ。2人にとってそれは身体と心のかげがえのない治療と癒やしの時間だったに違いない。バクダンとは一体なんだったのか今でも正体は不明なのだが、2人はよく「先生のお顔を見るだけで元